

「復讐の連鎖を超えて」

士師記 16：18－28

八月、私たちは広島、長崎、終戦の日を覚え、平和を祈ってきました。しかし現実には、攻撃に報復が重なり、「正義はこちらにある」「相手が先に始めた」と主張し合う中で、争いは繰り返されます。なぜ人は「やられたら、やり返す」という連鎖から抜け出せないのでしょうか。

士師サムソンの物語にも、復讐の連鎖が描かれています。ペリシテ人からイスラエルを救うナジル人として選ばれたサムソンですが、その生き方は破天荒でした。彼は自らの怒りや欲望のままに行動し、暴力に暴力を重ねる終わりのない復讐の連鎖を生み出しました。

士師記には「シューブ（戻る・立ち帰る）」というヘブライ語が何度も出てきます。しかしイスラエルの民は、主に立ち帰るのではなく、何度も以前の罪や偶像へ戻っていきます。サムソンもまた、傷つけられれば復讐へ、腹を立てれば暴力へと戻りました。

愛するデリラに力の秘密（神に献げられたナジル人のしるしである髪）を明かしたサムソンは、主が自分から離れたことに気づかずペリシテ人に捕らえられます。彼はちからを失い、目を奪われ、牢獄で働かされることになります。

しかし聖書は、「彼の髪の毛はそられた後、また伸び始めていた」と静かに告げます。髪は、サムソンが神に献げられたナジル人であることのしるしでした。すべてが終わったように見えても、神はサムソンを完全に見捨てられたものではありません。

そしてサムソンは最後に、「わたしを思い起こしてください。今一度、力を与えてください」と神に祈ります。自分の力ではなく、神に助けを求めたのです。しかしその祈りには、「わたしの二つの目の復讐をさせてください」という願いも残っていました。神を求めながら、なお復讐へ戻ろうとする。そこに、私たち人間の姿があります。彼は命と引き換えに多くの敵を打ち倒しますが、そこに残ったのは新たな死と悲しみだけであり、復讐によって復讐を終わらせることはできませんでした。

それに対して、十字架のイエス・キリストは、「父よ、彼らをお赦してください」と祈られました。サムソンは敵に痛みを返すことを願いましたが、キリストは敵の赦しを願われました。サムソンは敵を道連れにして死にましたが、キリストは敵を救うために死なれました。十字架において、キリストは復讐の連鎖を御自身のところで受け止め、断ち切られたのです。

詩編 85 編は、「慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけする」と語ります。自分の正義だけを絶対化すれば、争いと復讐が生まれます。しかし十字架において、神の慈しみとまこと、正義と平和が一つとなり、平和への道が開かれました。

私たちは何度も怒りや復讐へ戻ってしまいます。しかし神が求めておられるのは、復讐へ戻るのではなく、神のもとへ立ち帰ることです。自分自身も赦された者であることを覚え、家庭、職場、地域、教会で和解への一歩を選び、キリストの平和を携える者として歩みたいのです。